



平成19年度
中学生・高校生の国際理解・国際交流論文（中学校の部）
最優秀賞

「見落としているもの」

須賀川市立長沼中学校 3年 桑名 圭祐

様々な方面において、「グローバル化」「国際協調」などの言葉が声高に叫ばれる今日。しかしながら、私たちはそれらの意味を正しく理解できているのだろうか。国境を越えた世界中のつながりがより一層深まっていくであろうこれからの時代において、国際人として、そして日本人として、私たちはどのように考え、行動していけばよいのだろうか。その問いを、現在世界中で解決のための対策が講じられている「地球温暖化」を例に考えてみたいと思う。

例年になく暑い日が続き、連日テレビではその日の最高気温と消費電力のニュースが放送されていたが、今年の夏はついに74年ぶりに国内最高気温が更新された。この夏休みは、10日間という短い期間ではあるが、南半球、つまり季節が冬の都市にいたためか、いつになくこの暑さが異常なものに感じられた。この体験が、今まであまり実感としてなかった地球温暖化について高い関心を持つ機会となった。

調べてみると、今年だけでも地球規模で異常気温や豪雨など極端な気候が多発している。同じアジアのインドや中国、そして隣国の朝鮮半島での豪雨災害は、私たちの記憶に新しいものだ。私たちが暮らす日本でも、集中豪雨や真夏日が断続的に続くなど私たちの生活を脅かすようにもなっている。これらの災害の原因が地球温暖化であることはもはや疑いようのない事実である。しかも、異常気象の多発傾向は今後、加速する危険性が高いとのことでもある。

近代社会において、経済産業の発展は社会に繁栄をもたらし、私たちはその恩恵を享受してきた。しかし、その一方で自然環境を犠牲にしてきたのも事実である。その最たるものが、「化石燃料の消費」による大気中の二酸化炭素の増加である。しかも、その排出量は今後も増加し、地域別に見ると高成長を続けるアジアで伸び続け、2050年ごろには世界全体で現在の1.7倍に達する予想である。地球温暖化の問題はとて一国の問題として解決するものではないのである。一方で、開発途上国におけるエネルギー事情も忘れてはならない。現在地球上には、調理や暖房用の日常的なエネルギーとして、炭や薪、動物のフンを利用している人々がおよそ25億人いる。こうした燃料に依存する人々は、世界の人口の3分の1を占めているという驚くべき事実があるのだ。開発途上国には、「20パーセントの人口を占める工業先進国が地球の資源の80パーセントを利用して得られた繁栄を、今度は途上国が同じように追求するのも当然」と自らの権利を主張する意見もある。環境を犠牲にして成り立っている社会に生活する、しかも前者にあたる私たちは、この問題にどのように取り組まなければならないのかを真剣に考えていく必要があるのではないか。

世界には環境問題に限らず、食料、紛争、外交など、様々な問題があり、以前にもまして世界は密接につながりはじめている。この地球の未来を考えると、自国のみの都合が通るものではない、この世界を一つの共同体として捉えることが必要なのではないか。

それらの問題の解決には、それぞれの国の事情を考慮する必要があるだろう。日本の場合、軍事的関与の国際貢献には憲法上の制約がある。しかし、日本はバイオ燃料や省エネ技術などの技術面で、開発途上国のサポートをすることが最も適した国際貢献の一つではないかと考える。無論、現在の技術で抜本的なエネルギー、環境問題が解決するものではないが、何もせずに問題の先送りが許される状況ではないはずだ。

地球上には、環境問題をはじめとする様々な問題が存在する。それらの解決のためには、世界が一丸となって問題に取り組む必要がある。これこそ、本当の「国際協調」というものではないだろうか。だが、真の「国際協調」の根底には、様々な民族、文化、地域との相互理解を深める力となる、「自らの国やふるさとを愛する心」が必要であると私は思っている。外へ外へと視野を広げ、他の様々な文化、言葉などと出会い、そしてそこから新たな刺激をもらい、国の生活に取り入れていく。確かにこれは、「国際化」という面ではいいことであるかもしれない。しかし、本当にそれのみで自らを「国際人」と呼ぶことができるのだろうか。

先にも述べたように、私はこの夏に海外生活を経験した。日本という国を外の視点から見ることによって、これまで気付かなかった日本文化の独自性を知り、そしてまた、その素晴らしさ、大切さを痛感した。本当の「国際人」には、外からの刺激を受けるばかりではなく、自分のふるさとを深く理解し、大切に思う心が必要であると考えている。故郷を愛することができてこそ、自らの国をさらによくしていこうという気持ちが生まれるはずである。この、故郷への「誇り」があるからこそ、それが日本人としての自分の支えとなり、世界の他の地域も同様に愛することができるようになるのではないか。「地球温暖化」はあくまで一つの例にすぎず、世界にはまだ多くの問題が未解決のまま残されている。これらを解決する原動力となるものは、自分が住むこの世界を大切に思う心であると思う。そして、その原点は自分のふるさとを愛することであると私は考えるのである。

外へと目を向けるばかりが「国際人」ではない。内側から自らの国の実態を理解し、大切にできることこそ、本当の「国際協調」の第一歩であると、私は信じている。